

庭

障害者に「整形外科靴」

足の障害やリウマチ、糖尿病といった病気のため、なかなか合う靴がなく、歩くことが苦痛―。そんな悩みを解決する「整形外科靴」が登場した。一人ひとりの足に合わせて補正を重ね、歩行を助ける。一足10万円近くと高価なのが悩み。健康保険や福祉制度を利用して負担を軽減する方法もある。

東京の靴店が製作



歩きやすさを追求 値段の高さが悩み

リウマチで足が変形した人に「タコを削りすぎないように」とアドバイスする整形外科靴マイスター、シヨットさん(東京都新宿区で

問題は費用だ。「エルデ」のような靴店で作った場合、数万円から10万円近くかかる。公的な助成制度を利用する方法もある。リウマチの女性の場合は福祉事務所に申請し、約8万6千円のうち自己負担は1万3千円余で済んだ。医師の診断があれば健康保険の利用もできる。

「感覚がなかった足の裏が地面を感じるようになった。足の指も動くようになった」

東京都立川市の会社員、安養寺喬さん(47)は、最近履き始めた革靴の効果を喜んだ。以前は足の裏のタコがひどく、50歩も歩くと疲

れたが、今では1日6千歩でも平気という。30年以上も糖尿病を患い、皮膚が弱く感染しやすい。靴は、足の当たる部分に柔らかい素材を使い、圧迫しない特別な作りだ。

この靴を作ったのは、東京都新宿区にある靴店「足と靴の相談室エルデ」。ドイツ人カール・ハインツ・シヨットさんの指導のもと、障害に応じた靴を選び、足に合うまで補正を重ねる。糖尿病、リウマチ、股関節脱臼、足のまひなど障害を持つ人が訪れる。リウマチを患う東京都内

の女性(49)は、変形した足の状態に合わせて靴の中や靴底を補正し、足裏のタコに負担がかからないようにした。以前は病院の義肢装具士が作った靴を履いていたが、タコが「頭のてっぺんに響くくらい痛かった」とい

課題も少なくない。日本リウマチ友の会の長谷川三枝子理事長は「靴の重要さを理解して患者の訴えにきちんと対応できる医師が少ない。特に地方では、障害者用の靴がある靴店も少ない」と話す。同会が99年に行った調査では、靴を「我慢をしている」人が45%、「靴のことはあきらめてい

る」も4%あった。

東京都福祉機器総合センターがまとめたガイドブックには、「(福祉制度を利用して)作っても、不恰好だし足にあわなくて、結局みんな履かなくなる。税金の無駄遣い」という声が紹介されている。

同センターで靴の相談を受ける岩波君代さんは「利用者が増えれば、靴の具合が悪くても泣き寝入りしないことが大切。医師や義肢装具士、靴店など様々な分野の人が集まり、改善策を広く議論する必要があると思う」と話している。

2020年4月14日厚生労働委員会

日本共産党 宮本徹 配布資料②